

## 玄界灘小島嶼社会の持続的展開条件（その1） －向島を事例に－

小林 恒夫

佐賀県唐津市松南町152-1 佐賀大学海浜台地生物環境研究センター

### Sustainable Development Factors of the Society in Small Islands at Genkai Sea in Saga Prefecture

Tsuneo KOBAYASHI

Coastal Bioenvironment Center, Saga University,  
152-1 Shonan-cho, Karatsu 847-0021, Japan

#### 要 約

向島は唐津市の7島中、面積が最小で、人口は6番目だが最少の松島より数人多いだけの100人に満たない（80人・2009年3月）小島である。向島は産業別就業者数割合で7割もが漁業であり、7島の中で最も漁業割合の高い島で、小中学校の教職員を除くと、7島の中で唯一漁業世帯のみの島である。生活の基礎条件である電気、上下水道は比較的早い時期に完備され、この限りでは、都会と基本的に変わりがない条件ができています。また住居は1世帯で親世代と後継者世代が2階建1軒をそれぞれ保有している。しかし、交通条件と病院関係においては大きなハンディを抱えている。

向島の産業は、かつては半農半漁と言われながらも、自給的性格が強い中で、むしろ「イモ・ムギ」の農業が主体（農主漁従）であった。しかしその後、海士漁の発展に伴い、海士漁を主体とする漁業の比重が増し、農業は「販売なし」の小規模で家庭菜園的な野菜作に縮小し、統計上「農家」は消滅した。

今日の向島の漁業は、生産量の激減、生産額の伸び悩みのもとで、その中心である海士漁においては稚貝等の放流による栽培漁業という性格を強めてきている。また、磯焼けの発生が確認され、将来不安が高まっている。また、向島の漁業世帯には近年、20代～30代の後継者のUターンが数人見られ、むしろ青年漁業者の増加が確認される。しかし、彼ら青年漁業者は全て未婚であり、伴侶確保が大きな課題とされている。

そのこととも関連して、島の小中学校の生徒数は2009年度で小学4年生と中学3年生の各1人（計2人）のみで、2010年3月で中学校は廃校、2012年3月で小学生の消滅という将来が見えている。

以上の漁業資源・経営問題と、青年漁業者（漁業後継者）の未婚問題と、中学校廃校問題（小学校廃校は未決だが）という三重苦に如何に対応するのか、いま向島社会が抱えている基本問題と考えられる。

そこでこれらのトリレンマ（三重苦）に対する提言を示すことが本稿の課題（末尾の提言を参照）である。

#### Summary

Mukushima is the smallest island in the seven islands of Karatsu, Saga Prefecture. And there are less than 100 persons in this island. 70 % of workers in this island are fishermen and this ratio is the highest in these seven islands. Living basis such as electricity, water supply, flush toilet is well-equipped already. Further Almost of the fishery households have two houses respectively. But transportation and medical care is not good.

Agriculture was main living means rather than fishery till 1960s. But after 1970s fishery increased gradually and stood above agriculture. Conversely agriculture decreased rapidly and main crops changed from potato and barley to vegetables.

There are three social problems in this island. One is the stagnant of fishery product. Two is unmarried problem of young fishery successors. And three is the crisis of close of primary school and junior high school near future. The most important social problem for this island's people is to solve these trilemma.

キーワード(Key words):玄界灘小島嶼 (Small Islands in Genkai Sea)、向島 (Mukushima)、持続的展開条件 (Sustainable Development Factors)、三重苦 (Trilemma)

## はじめにー課題・方法・視点ー

玄海諸島の7つの島々を中心に、福岡県北の筑前諸島から長崎県の平戸諸島までの玄界灘に広く浮かぶ島々の多くに共通する特徴は、漁業従事者率や専業漁業率が高く、漁業を基盤としていることであると言われる（註1）。たしかに全体的な特徴付けとしてはその通りだと感じるが、しかし図2にも見られるように、玄海諸島の中には漁業以外の産業割合の高い島も存在し、必ずしも漁業が基盤とは言えない島も存在する。また、人口規模を見ても、500人台の小川島、神集島、馬渡島と、300人台の高島と、200人台の加唐島と、100人未満の向島、松島の間では大きな差が存在するし、根拠資料の提示は省略するが、漁業形態や宗教・文化にも少なからずの差が見られるため、さらなる類型化を行いながら詳細に見ていく必要がある。

そのような観点から、本稿は向島の現状と将来展望を明らかにすることを課題とする。方法は島民世帯世帯調査、考察の視点は島民生活の持続性に置いている。

## I 現状分析

### 1. ミクロコスモス（小宇宙）の変容と現状の課題の解明

向島の歴史は比較的新しく、集落が形成されたのは江戸・文禄・慶長以降と言われる。それ以来、台地を中心とする畑で採れた裸麦・甘藷・豆類を主食とし、周囲の海からの海藻・貝類・魚類を加えて、まさに半農半漁（農主漁従）による自給的な生活が営まれてきた。また本島は佐賀県西北端の冬季に波荒き玄界灘に浮かぶ孤島であるため、江戸期には軽犯罪者の流刑地ともなっていた。こうして、本島は近海島嶼でありながらも、基本的には戦後の1960年頃までは、まさにミクロコスモス（小宇宙）を形成してきたことができる。

しかし、その後のわが国の高度成長はこのような本島の長年の自給自足的な小集落（ミクロコスモス）の生業と社会を激変させた。本章（I）は、その変化と現状を探ることを課題とする。

## 2. 向島の今

### （1）位置と人口・世帯数

#### ー玄海諸島の中で面積が最小の佐賀県西端の小島ー

向島は唐津市（佐賀県）の7つの島（玄海諸島）の中で面積が最も小さく、二番目・三番目に小さい高島と松島のそれぞれ半分程度の、面積30ha、周囲4kmの極めて小さな島である。また7つの島の中で最西端に位置し、その南西方向1km先に長崎県の鷹島が迫り、また北東方向には玄海町にある九州電力の原子力発電所が見える。

人口は松島より少し多いが、1980年代後半の140人台から減少を続け2004年以降は100人を切った。

1986年に世帯数が12戸、人口が14人増加した（図1）のは、住民登録のオンライン化に伴って、それまで別枠扱いされてきた向島小中学校の教職員数が計上されるようになったことによる台帳操作の変更の影響である。したがって1985年までの数値には学校教職員は除かれていたが、1986年以降のものにはそれが含まれることになり、1986年以降の数値は文字通り全島民の数値となったわけである。

さて、漁業世帯数はここ20数年間20世帯台の水準を維持してきており、むしろ持続的に推移してきた点が注目される。その要因の1つは、これまで漁業世帯は基本的に長男が継ぎ、長男以外は島外に移住する習慣があったからである。

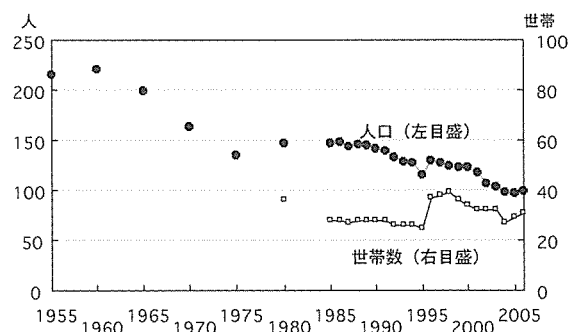


図1 人口と世帯数の推移

資料：『全国離島人口総覧（改訂版）』全国離島振興協議会、1983年、『離島統計年報』日本離島センター、各年版。

### （2）産業の特徴

#### ー玄海諸島7島中、漁業就業者割合が最大で、漁業に特化した島ー

向島の産業構造上の最大の特徴は、図2に見られるように、就業者数において漁業の占める

割合が玄海諸島7島の中で最も高く、しかも7割以上というように特別に高いことである。すなわち向島は漁業にきわめて特化した島であると言える。

次いで、「教育学習支援業」の割合が2割強あることも注目される。これは10名前後の向島小中学校の教職員の存在であり、人口が絶対的に少ない向島の中で相対的に大きな部分を占める結果となっているためである。

そして両者だけで95%以上を占め、その他は運輸業（定期便）と商店（卸売り小売業）が少々存在するだけである。なお、後述のように定期船と商店は同一世帯であり、かつ漁業世帯でもあるため、事実上、向島は漁業世帯と教職員世帯のみの島と言える。教職員世帯を除くと漁業世帯のみとなるのは、唐津市7島の中では向島ただ1つである。

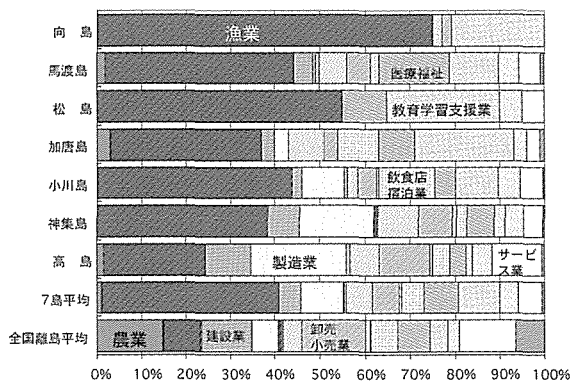


図2 産業別就業者数割合（2005年）

資料：『離島統計年報2007年』日本離島センター、2008年。

### （3）紹介本に描かれた向島像

#### ー「学校磯」の取り組みー

全国の全ての有人島を回ったという木本修次氏の著書（註2）に向島の「学校磯」への言及があるが、その中身については残念ながらほとんど触れられていない。さて学校磯とは、第2次世界大戦直後の1946年に、町財政逼迫のため学校運営費の一部を島民が負担するという条件で島内に町立向島小中学校が建設されたが、その際の島民による経費捻出方法が「学校磯」の取り組みであった。島の南東部の一部を「学校磯」とし、そこで児童・生徒の父兄である漁師の協力の下で教職員と児童・生徒がウニ、ワカメ、ヒジキ等の海産物を採捕し、それを販売して学校運営費の一部に充てるといったものであ

た。なお、この活動は、単に金銭的に収入を得るということだけでなく、体験学習の意味も持っていたことは言うまでもない。

その後、港湾工事で学校磯の面積は縮小したが、そこでの海産物採捕は現在でも続けられており、近年でも年間数万円の収入を得ているという（註3）。

### （4）インフラの整備

離島振興法適用による全額補助事業として防波堤が1968年にはじめて完成した。

電気については、1950年の自家発電装置の設置によって島内の全世帯に電灯が灯り、またラジオを聞く家も現れたが、当時はまだ通電が1日夕方4時間に限られていたため、石油ランプとの併用を強いられた。しかし通電開始は画期的出来事であり、この年には映写会も行われた。その後1969年に九州電力（株）の海底ケーブルが開通し、以後、電気の全面的使用が可能となった。

上水道については、1970年に島内の小河川河口部への浄水場の設置によって公共化が開始されたが、その後その河川上部のダムと台地上の新浄水場の設置によって整備が進んだ。

他方、下水道については、1996年に玄海諸島7島中のモデル事業として下水処理場が設置され、水洗化が実現した。

こうして、7島の中では比較的早い時期にインフラの整備と高度化がなされ、この面では都市部と基本的に変わらない生活条件が整備されている（註4）。そしてこれは後述の入客数増加の1つの基礎条件となっているし、今後の島の活性化の重要な条件として存在している。

### （5）交通

定期船は人だけでなく郵便物も運ぶため、今でも郵便船と呼ばれている。戦後直後は偶数日に運行していたが、現在は1日2往復している。年間を通じて、本土（星賀港）発は11:00と16:30、島（向島港）発は7:15と16:00である。このような時間帯および冬の時化時の不通というリスクのため、定期船利用による島民の通勤・通学者はいない。現在、島民全員が漁業者であり、また住み込みの教職員であることは、このような交通条件にも規定されている。

### (6) 診療室

本島民には疾患が多かったため、切望されていた診療所開設（公民館経営）が1948年に実現した。当時は週2回、6～8時と17～20時に玄海町の吉田病院の院長の来診が行われていた（註5）。

現在は、高齢者センター内に診療室が設置され、市の委託により月2回、木曜日に本土（肥前町星賀）の医院の医者がチャーター便で来島して派遣診療にあたっている。診療室を訪ねるのは特定の高齢者が中心であるという。

### (7) 宗教と葬儀

島民の先祖の多くは玄海町からの移住者と言われ（註6）、出身地とのつながりから浄土宗寺院の檀家となっている世帯が2～3戸あるが、その他は浄土真宗の寺院の檀家となっているという。かつて葬儀は自宅で行われ、台地上の墓地群の一角に埋葬（土葬に）された（註7）が、現在では本土の葬儀場で行われ茶毘に付される。

## 3. 向島の産業史

### －農業主体の半農半漁から漁業専業へ－

#### (1) 農業

##### －イモ・ムギ農業から家庭菜園的野菜栽培へ－

1960年農業センサス集落カードによると、同年に向島には農家が23戸（全て兼業農家）あり、水田は50aほどしかなかったが、畑は約10haあり、裸麦9.3ha、甘藷5.8haが作られた一方で、稲は50a、野菜類は26a程度しか栽培されなかった。聞き取りによると、当時、夏場は島の台地を中心とした畑約10haに甘藷や豆類が作付けされ、また冬場には裸麦が全面的に作付けされ、畑で二毛作栽培が行われていたという。まさに「イモ・ムギ」農業という実態にあった。また同じく1960年農業センサスによると、12戸が役牛を12頭、15戸が鶏80羽を飼っていた。機械類はなかった。なお、センサスでは全て販売なしとなっている。

向島では教職員世帯以外は全て漁業世帯であり、漁業世帯数はもともと20数戸であったから（註8）、農家が23戸ということは、漁業世帯のほとんどが農業も営んでいたということを意味し、高度経済成長期初期までは向島のほとんどの漁業世帯は半農半漁世帯であったと見られる。

そして1960年頃でも農家（半農半漁＝農漁家）の半数はまだ牛を飼っており、耕耘・運搬に使っていたのである。

農業センサスで1960年に農産物の販売はなかったとされているように、当時の農業は自給的なものに縮小してきたと推測される。しかし、聞き取り調査によると、高度成長期以前は、漁業よりもむしろ農業の比重のほうが大きく、半農半漁と言っても「農主漁従」（註9）という実態であり、農家は平均的に50aほどの畑を持ち、裸麦はほとんど自給に回し、甘藷は温暖な本島の適作物として収量も高く、少なからず販売もしていたようである。あるいは甘藷は島原半島との間でソーメンや味噌と物々交換もしたという。こうして甘藷は経済的にも重要な作物であり、競技会も行われ、優良者は表彰された。また甘藷は自らの食料としても重要であり、当時は甘藷と裸麦がむしろ主食となっていた。米も盆・正月以外は単独ではなく麦飯として食べられた（註10）。

他方、後述のように、1960年代以降漁業の中身が魚釣りや網・縄漁から海士漁に変化し、その後海士漁がますます盛んになってくるに伴い、農業のほうは絶対的にも相対的にも縮小し、また農業の中身も「イモ・ムギ」から野菜類に変化し、今や農業はきわめて小規模で家庭菜園程度の自給的野菜栽培に縮小してきており、農業センサスで把握している「農家」は1970年以降消滅した。従って農業センサスからはもはや農業の情報は得られない。

しかし、『離島統計年報』からは表1のように現在でもいまだ畑と樹園地がそれぞれ1ha程度存在し、豆・雑穀、野菜、果実が栽培されていることを確認することができる。1960年当時の畑面積10haと比べると、そのほとんどが放棄されたとはいえ、いまだ1haほどが自給的な物の栽培に利用されていることは島民生活上重要な事柄と言える。また1960年農業センサスでは樹園地は捉えられていなかったが、実際は表1のように、柿やミカン類の果実栽培が行われてきていたのである。なお、このような畑作や果実作の主な担い手は今昔とも中高年婦人である。そして今でも、島の傾斜地や台地上を歩くと畑仕事をしている彼女らに会うことができる。このような様子を見ることによって、島の静かな息

づかいを感じることができる。

なお、かつてイモ・ムギ栽培が盛んだった頃は、島の台地上のかなりの場所が畑となってまとまって存在していたため、とくに冬の季節風によってこれらの畑作物が吹き飛ばされることも少なくなかったと聞く。しかし現在では、畑の大半が放棄されて藪化したため、現在も存在する1ha程度の畑や果樹園は藪化した林の中に点在して残される形となり、周りの藪化した林地が防風林の役目を果たすようになったため、畑作物が季節風に吹き飛ばされることはなくなった。

また、向島にはイノシシはいなくなったと聞く。本土や他の玄海諸島でもイノシシ害が増加している中で、向島での畑作は防護柵を作る必要もなく、この意味でも良好な農業環境を保持しており、注目に値する。

こうして、自給的生産とはいえ、また極めて狭小とはいえ、残された畑や果樹園は良好な条件を保っており、利用価値が高い。これらの「もったいない」資源を将来とも有効に利用していくことを考えるべきではなかろうか。（II提言6を参照）

表1 向島における農地面積と作物生産額の推移

	農地面積 (ha)		作物生産額 (百万円)		
	畑	樹園地	豆・雑穀	野菜	果実
1985			0.1	0.1	0.1
1986	1				
1987	1			0.1	
1988	1			0.1	
1989	1			0.1	
1990	1			0.1	
1991	1		0.1	0.2	0.1
1992	1	1	0.1	0.2	0.1
1993	1	1	0.1	0.3	0.1
1994	1	1	0.1	0.3	0.1
1995	1	1	0.1	0.3	0.1
1996	1	1	0.1	0.3	0.1
1997	1	1	0.1	0.3	0.1
1998	1	1	0.1	0.3	0.1
1999	1	1	0.1	0.3	0.1
2000	1	1	0.1	0.3	0.1
2001	1	1	0.1	0.2	0.1
2002	1	1	0.1	0.2	0.1
2003	1	1	0.1	0.2	0.1
2004	1	1	0.1	0.2	0.1
2005	1	1	0.1	0.2	0.1

資料：『離島統計年報』各年版、日本離島センター。

注：農地面積は当該年の3月末現在、作物生産額は当該年1年間。

## （2）漁業

向島における最初の主要な生業は農業であり、漁業は「農主漁従」と言われたようにむしろ農業に付随するものとして展開してきた。しかし1970年代以降、日本全体における米生産過剰や食料消費構造の変化に伴うイモ・ムギ農業の衰退のもとで、向島のイモ・ムギ農業も衰退した。それに対し、他方の漁業においては中心的な中身がそれまでの魚釣りや網・縄漁から海士漁に変化し、海士漁が盛んになったため（註11）、それ以降、海士漁を主体とする漁業が向島の漁業世帯の中心的なものとなり、向島は海士漁中心の漁業だけの島となったのである。

さてここで、向島の漁業の中心が釣り・網・縄漁から海士漁にシフトしていった契機について、古川侃さん（79歳）と小林俊二さん（50歳）の話を総合して紹介したい。侃さんによると、1960年頃までは向島の漁業は刺網などを主体としており、上述のように漁業よりもむしろ農業のほうが島の生業の中心であったという。以前からウニ・アワビ・サザエも捕ってはいたが本格的な素潜り漁は行っていなかったという。そのような状況下で、1960年頃に山口県の業者が向島の近海を1週間ほど借り受けて素潜り漁を行い、アカウニ・ムラサキウニを捕って高く販売したという。それを知って、まず小林久さん（小林俊二さんの父親・故人）が冬場に北目（きため）と呼ばれる島東部の地先に禪一本で素潜りをしてアワビ・サザエを捕ったという。寒さのため1時間ほど潜っては浜で奥さんが火を炊いて待っており、体を温めてもう1回海に入ったが、素潜りは寒さのため1日2回ほどが限度だったという。したがって小林さんのまねをして素潜りをする人はその後10年間はいなかったという。ところが10年ほど経ってウェットスーツが開発販売され、小林さんがそれを使って、寒さ対策として効果が得られたため、皆がこぞってウェットスーツでの海士漁を始めたことが、向島において海士漁が本格的に開始されたきっかけだったという。

## 4. 向島の漁業

### （1）今日の特徴

向島の漁業の中心はかつて魚類（1本釣りと巾着網漁など）であったが、1980年代後半以降

その水揚額が減少しつづけ、他方でウニ・アワビ・サザエ等（海士漁）の水揚額が増加したため、今日では海士漁を中心に併せて釣り・網・縄漁も行うものへとその中身が変化した。なお、冬場は海士漁が禁漁となるため、釣り・網・縄漁が行われ、夏場は主に海士漁が行われるというように、これら2つの漁業種類は季節的に分かれて行われている。

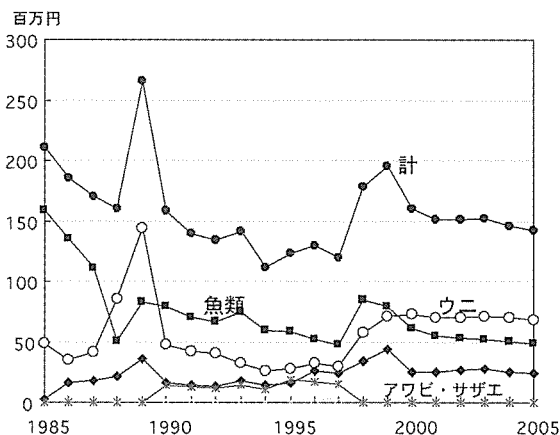


図3 向島における漁業種類別水揚額（属人）の推移

資料：『離島統計年報』各年版。

## （2）漁業生産量の減少とそれへの対策

今日における漁業の基本的問題は、水揚量（生産量）の減少である。それは島全体＝漁業世帯全体においても（図4）、漁業世帯1戸においても（図5）同様である。漁業世帯数は微減傾向にあるから、漁業世帯1戸当たりの水揚量の減少の程度（図5）は、島全体（漁業世帯全体）における水揚量の減少（図4）ほどではないが、漁業世帯1戸当たりの水揚量も減少しているということは、個別の漁業経営体が縮小生産を余儀なくされ、深刻な危機的状況にあると見ることができる。

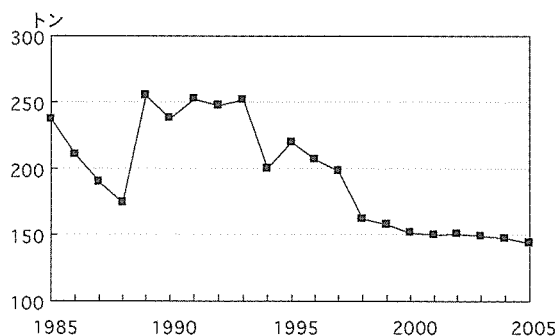


図4 向島における水産物水揚量（属人）の推移（島全体）

資料：『離島統計年報』各年版。

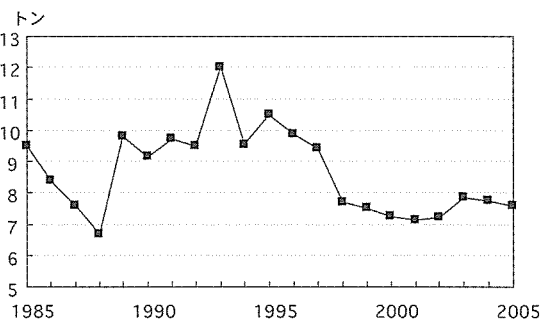


図5 向島の漁業世帯1戸当たりの漁業生産量の推移

資料：『離島統計年報』日本離島センター、『漁業センサス』農水省。以下のグラフも断りがない限り同様である。  
注：漁業センサスの漁家数が5年間継続したという前提で推計した。

今回の我々の漁業世帯調査において、「魚もウニ・アワビも10年前の3分の2程度になっている」という多くの回答を得たが、統計もそのことを証明している。

それに対し目下、アカウニ、バフンウニ、クロアワビ、ナマコについては国の漁業再生交付金を利用しての稚貝等の放流を行い、またアカウニ、バフンウニ、ナマコについては漁協肥前支所ないし向島海士部会において独自に幼生の放流を行って資源の維持に努めている。

その結果、アカウニについては多くの海士が放流の効果を認めているが、アワビについては消極的な評価をしている。

こうして向島の海士漁は稚貝等の放流によって栽培漁業という性格を強めている。今後とも放流の効果を確認・検証しつつ、資源保全型漁業のあり方を模索していく必要があろう。

関連して、海士漁資源の減少の要因としては口々に磯焼けが指摘された（註12）。海士漁のポイントの何方所かで磯焼け現象が出てきているという。原因としては、ガンガゼというウニの一種によるカジメ等の海藻の食害や密漁および自分たちの乱獲によるものではないかという回答を得た。

密漁に対しては夜間の監視をしているが効果は出ていないという。

磯焼け問題は全国的問題であり、関係者による調査研究が待たれる。また乱獲問題は資源保全型漁業のあり方を目指して、まずは海士部会メンバー内での検討が求められる。

## （3）漁業生産額の推移

図3で見たように、漁業生産額総額も減少傾向

向であると言える。なお漁業世帯1戸当たりの漁業生産額は1985年以降ほぼコンスタントに推移しているようである。ただ近年の生産額は700～800万円だとしても、それは経費込みであることに注意しなければならない。また近年の燃料代の値上げを考慮すると所得水準は厳しいと言わざるを得ない。

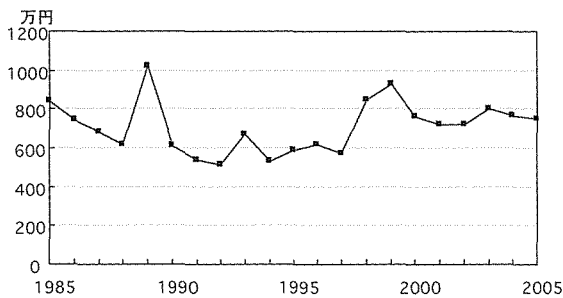


図6 向島の漁業世帯1戸当たり漁業生産額の推移  
資料、註：図5に同じ。

#### （4）漁業の担い手構造－青年漁業者問題－

島も含めて漁業の衰退に伴って漁業就業者の高齢化と青年後継者の不足が問題となっている。全体的にはそうであるが、向島の漁業従事者の年齢構成は目下、基本的に健全といえる。2009年でも50歳代が漁業従事者の中心となっているからである（図8）。

さて、2003年と2009年は6年差であるから、もし両年に人口移動がなかったとするならば、図9の目盛りを1つ下にずらして図8と比較すると、両図はおおむね重なるはずである。そこで、

両図を比較してみると、多少デコボコはあるが、両図は全体としてほぼ重なっていると見てよい。

しかし2003年の15～19歳男子2人が6年後の2009年には3人になり、また2003年の20～24歳男子3人が、6年後の2009年には5人に増えていることから、この間に20歳代の者が2～3人島に戻ってきたか、あるいは学校を卒業して自営漁業を行っており、その意味で20歳代の青年漁業者が増えたと推測される。しかし、それに対して2009年には20代～30代の女性がいなくなっていることにも同時に注意しなければならない。

以上の事柄を具体的に見てみよう。Aさん（33歳）は2男1女の次男で、肥前町で数年間仕事をしていたが、長男が外に出ることになったので、1990年代半ばに実家に戻り、後継者として漁業を始めた。そしてすでに10数年間の漁業経験を持ち、この年代の後継者の中で文字通り先輩格となっている。

Bさん（32歳）は4人兄弟の長男で、唐津市内の高校を卒業して、唐津市内で12年間仕事をしていたが、2007年に実家に戻り、漁業の手伝いを始めた。

Cさん（27歳）とDさん（25歳）は兄弟で、三男のCさんは2000年に唐津市内の高校を卒業して福岡の会社に入り、関西に派遣されて4年間仕事をしていたが、体調を崩したため2004年に退職して実家に戻り、家の漁業の手伝いを始めた。四男のDさんは唐津市内の高校を卒業す

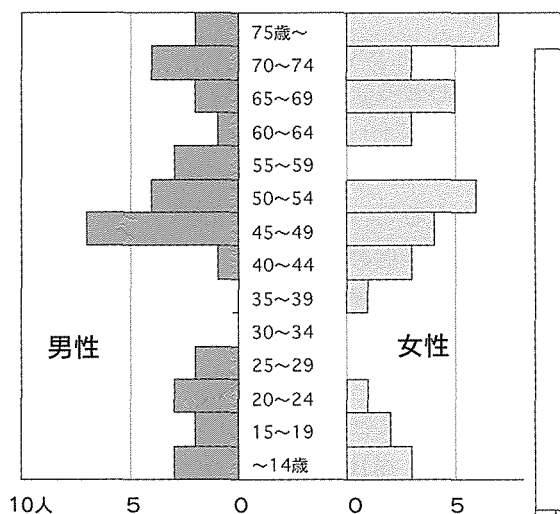


図7 漁業世帯の世帯員構成（2003年）

資料：『2003年漁業センサス』。

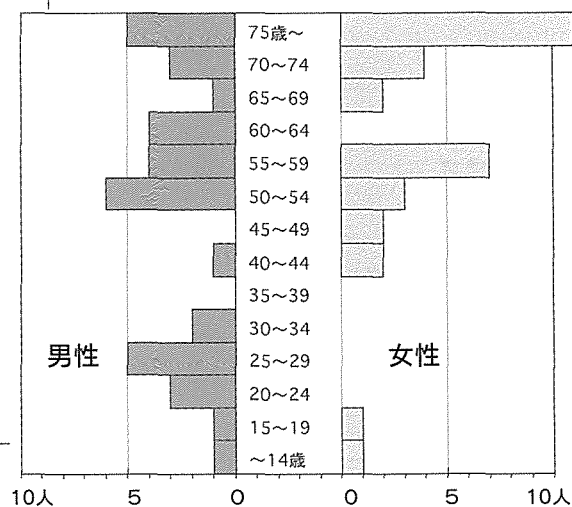


図8 漁業世帯の世帯員構成（2009年）

資料：2009年1月調査結果。

るとすぐに実家に戻り漁業の手伝いを始めた。

Eさん(25歳)とFさん(20歳)も兄弟で、長男のEさんは唐津市内の高校を卒業して4年間福岡市の会社に勤めていたが、2006年22歳の時に実家に戻り、後継者として漁業などの手伝いを始めた。また三男のFさんは唐津市内の高校を卒業して、唐津市内で仕事をしていましたが、辞めて一旦実家に戻り次の仕事を探しながら今は父や兄と一緒に実家の漁業などを手伝っている。

Gさん(20歳)は一人息子で、唐津市内の高校を卒業してすぐに実家の後継者として漁業の手伝いを始めた。

こうして20～30代の漁業後継者が少なからず形成されたが、彼らは未婚であるため如何にして伴侶を捜すかということ、およびそれと関わって海士漁を主体とする向島の漁業の持続的システムを如何に確立していくかという2つの高いハードルを抱えている。そして、この2つの課題は、漁業の将来性が開けないと伴侶確保も困難であるというように、相互に深く関わっているだけに、喫緊の課題として島を挙げて取り組まなければならない地域的課題ともなっている。

## 5. ブルーツーリズムの可能性

図1には現れなかったが、向島は佐賀県最西端の目立たない小島であるが、その割には一定数の観光客が来ていることに注目する必要がある。島に来る観光客の主な目的は、純粋無垢の静かできれいな小島での魚釣りや民宿で新鮮で

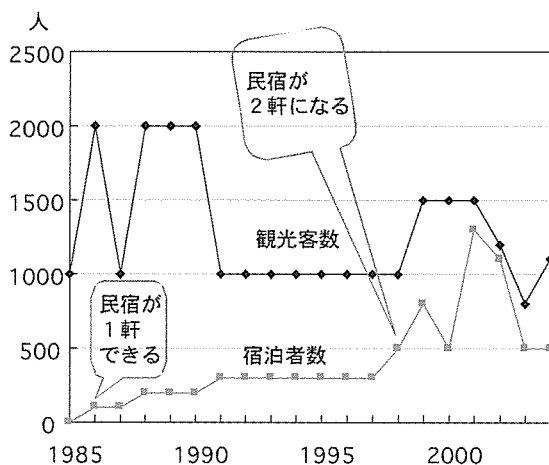


図9 向島への観光客数と宿泊者数の推移

資料：『離島統計年報』各年版。

豊富な魚料理を食べることである。

これら以外にも、灯台見学などの島内散策をする客もいないわけではないが、見学対象とそこへの案内表示が必ずしも観光客本意に整備されていないし(註13)、これらの観光資源を活かすという島民意識も必ずしも高いとは思われないため、せつかくの観光資源の多くがまだ眠っていると言わざるを得ない。

したがって、これらの観光資源を活かすならば、魚釣りと魚料理の堪能目的以外にも観光目的を増やす可能性は少なくない。そうすれば、これらの目的が相互依存的に高めあつて観光客数は増えると考えられる(提言5を参照)。

## 6. 学校廃校問題

2009年度の向島小中学校の生徒数は小学4年生1人と中学3年生の2人のみであるため、2010年度にはHさんが中学校を卒業すると中学生がいなくなるので、唐津市は中学校を廃校にする方針だと聞く。そうすると本年度小学4年生のIさんは2012年4月からは島外の星賀中学校に通わなければならない。同時にその年度から小学生もいなくなるため、小学校の行く末も不安である。

松島のように小学校が廃校でなく休校扱いとなると、小学生になる生徒が出てくると分校として復活可能である。しかし廃校扱いとなると、小学生になる生徒が出てきても、島外の小学校に通わなければならない。小学生を島外の学校に通わせるのは親子とも物心両面で苦勞が絶えない。

Jさん(55歳)によると、もし小学生を島外に通わせるようなことになると、親子ともども島外(本土)に移住することにもなりかねず、離島を促す要因となると言う。また学校がない島となると、子弟の教育という面からも、島外からの伴侶の確保においてもマイナス要因となり、結婚問題が深刻さを増す。そのことによって子供の出産も難しくなる。そうすると、ますます小学校の存立条件が遠のく。

また廃校となると教職員世帯も島外に転居し、その分、島民世帯数が減少する。向島の場合、現在20戸の漁業世帯と9戸の教職員世帯という世帯構成なので、教職員世帯が全世帯の3分の1近くを占めているわけだから、3年後には向島



の世帯数は29から20に減少し、向島はまったく漁業世帯だけの島となってしまうし、島民人口も減る。

こうして今、向島では、以上のような悪循環によって、島社会の縮小再生産のメカニズムが開始されようとしている。このような現実に対抗すべきかがいま問われている。

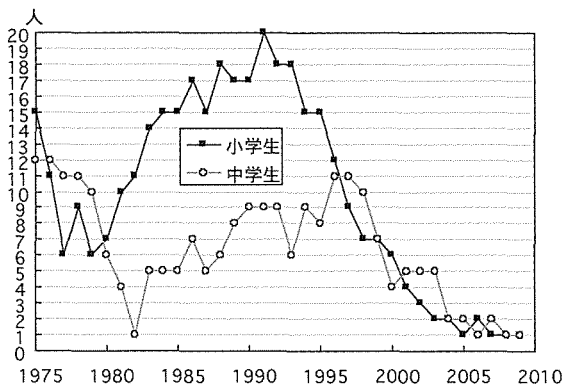


図10 向島小中学校の児童・生徒数の推移

資料：向島小中学校資料。

## II 提言

以上の漁業資源・経営問題と、青年漁業者（漁業後継者）の未婚問題と、中学校廃校問題（小学校廃校は未決だが）という三重苦に如何に対応するかが、いま向島社会が抱えている基本問題と考えられる。そこで、これらの問題に関する事柄を中心に思い当たる提言（コメント）を追加して本稿を閉じたい。

### 1. 漁業資源・経営対策

#### (1) 海士漁資源の維持管理

海士漁資源の危機に対しては、漁場の改善と海士漁資源の育成の2つの側面からの対応が求められる。前者については、磯焼け等による漁場環境悪化に対し、原因解明と改善策が求められるが、そのためには研究者と漁師・漁業協同組合と行政といった関係者間の連携・協力が必要であると考えられる。後者に対しては、現在われている離島漁業再生事業や漁協・海士部会での稚魚等放流による栽培漁業の成果を検証しつつ、行政の支援を含めた対応が必要と考えられる。

#### (2) 他の海士漁地区との交流・連携

磯焼け等の漁場環境悪化は向島だけの問題で

はなく、かなり一般的な問題であるため、同じような環境異変問題で悩んでいる漁業地域・地区との情報交換・連携が必要であると考えられる。とくに海士漁自体が減少してきた中では、まずは海士漁を行っている漁業地域・地区との情報交換・交流が求められよう。海士漁地区間交流によって共通する課題の解決を模索する必要があると考える。

### (3) 釣漁の振興

向島の漁業は夏場の海士・海女漁と冬場の釣漁の二本柱で成り立っている。したがって、釣漁の将来方向をどうするかがもう1つの課題となる。その場合、どのような漁種を中心とするかということと、規格外の魚の加工・販売の模索が必要と考えられる。

### (4) 漁師集団・リーダーの育成

現在の主要な担い手である50代世代は比較的人数が多いため、漁協と連携して、海女部会だけでなく、釣漁の分野においても集団的な指導部のような組織をつくり、向島の漁業の将来方向を模索していったらどうか。

なお50代の担い手は男女とも比較的厚い層となっているため、女性のパワーも発揮できる分野を発見していく必要もある。

## 2. 青年漁業者（漁業後継者）問題

上述のように向島には20～30代の漁業後継者が7名ほど存在する。しかし彼らの全員が未婚であり将来性不安を抱えていることが問題となっている。将来展望を切り開くためには2つの壁を突破する必要がある。1つは漁業経営の安定化である。その対応については上述したとおりだが、目下漁業の中心的メンバーである40～50代の漁師たちと協力しながら彼ら若手とともにそのための模索を行っていく必要がある。もう1つの面は以下のような社会的活動であろう。

#### (1) 生活スタイルの近代化

向島での生活基盤（電気・ガス・水道・水洗トイレ）は基本的に完備している。また若者や中堅の漁師はほとんど携帯電話を使用している。さらに幸い、現在50～60代になっている島の中心的な漁師たちが1970年代に結婚して所帯を

持った折に、当時海士漁が順調に伸びていたことを背景に、多くの漁業世帯が母屋のほかにもう1つ住宅を新築し、集落のメインストリートを挟んでその両側にそれぞれ1軒ずつ住居を構えている。一方が親夫婦さらには祖父母の住まいであり、他方が後継者夫婦（当時）の住まいである。こうして、向島の後継者は住居面ではむしろ都市以上の良好な条件を有している。

問題は、このことを明確に将来の伴侶に宣伝しつつ、後継者やその夫婦がさらに社会的に自立できるように、休日や生活費貸与に関するルールを作ることが必要である。この点では、農業サイドの家族経営協定（註14）を援用することが有効と考える。

## （2）「婚活」（註15）

後継者が伴侶を確保するためには、まず両者が会える機会を増やすことが重要である。その場合、2つのことを考える必要がある。

1つは、結婚はまずは本人自身が積極的に機会を見つけて行動することが基本であることから、本人にそのような自由な行動が行えるための時間を増やす必要がある。そのためにも、上述のような休日や自由時間の確保が重要となる。この問題は直接的には後継者自身やその家族の問題であるが、将来方向を左右する地域全体の問題でもあるため、島民全員が自覚的に対応していかなければならない問題である。

2つは、後継者同士が、あるいはその他の島民グループが後継者と女性の出会いの場を組織的に増やしていく必要がある。上述の離島漁業再生事業の一環として2007年と08年の2回、未婚女性との交流会を行っているが、これ以外にも適切な交流会を開いていく必要がある。

## （3）公式の後継者組織の形成と行動

上述の未婚女性との交流会は補助事業の一環であり、また中堅の漁業者の主導によるものであるが、それ以外に後継者自身による「手作りの」交流会が必要に思われる。それは昔風に言うところ「合ハイ（合同ハイキング）・合コン（合同コンパ）」である。そのためには、それを推進していくための公式の組織が必要となる。そこで改めて、後継者組織を設立してはどうだろうか。といっても、すでに実質的に後継者グループが

自然発生的にできているわけだから、それに名称を付けて多少改まって規約や役員などを決めるということで済む。そして、この組織名でもって他の女性組織などに交流を求めていくわけである。

交流する場所としては、なんと言っても自然豊かな向島がいちばんである。その際、向島内で見せる物としては、島の自然と歴史的遺物および2住居世帯の存在である。島の自然と歴史的遺物の案内については、下記5の（1）のような欠点を改善することと、自らがそれらに関する知識を得る必要がある。そのためには年長者との交流が必要となる。

小グループでも公式的な行動を行うことは社会的な人格形成にも寄与し、将来島のリーダーに育っていくことにつながる。

なお、このようなグループ活動の推進に関しては、かつての青年団や4Hクラブ（農業後継者グループ）の活動やその指導機関である農業改良普及センターの役割が参考となる。

## 3. 島外で就業できる条件づくり

漁業を巡る状況の悪化や燃料代高騰なども考慮すると、今後は年間あるいは冬場に島外での仕事によって家計を補完していく必要が出てくるかもしれない。また、子育ての済んだ40代の女性や今後迎える青年後継者の伴侶となる若手女性の中には自家漁業以外の島外での就業を望む者も出てくるかもしれない。その場合は、彼女らが島外で仕事ができるように定期船の時間帯を考慮していくことも必要と考える。

## 4. 学校廃校

上述のように、小中学校の廃校の島民への悪影響は大きい。なかでも小学校の廃校問題は物質的な面だけでなく精神的な面でもダメージが大きい。このダメージは離島だからこそ大きいことを関係機関に知らせて、「特例」的な対応を求めていく必要がある。

なおその場合、それに対する条件が求められるであろう。たとえば、小学生がいなくても廃校とせず（休校とし）、その間、上述の「学校磯」を利用した磯体験や、学校舎を利用しての小島体験や野外観察などの課外授業を受け入れることなどをしてはどうだろうか。

## 5. グリーンツーリズムの推進（註16）

### （1）散策案内の改善

「七色の島づくり事業」（註17）によって各種案内板が設置されたが、観光案内板において、たとえば遊歩道が2つあるのに案内板の矢印は1つしかない。また、立岩は海上からしか見えないように言われているが実際は海岸からも見える。あるいは、ガイドブック等に載っている金山跡の場所についての案内表示がない。さらには、灯台のところにある島周辺の案内板には他の島などの方向は示してあるが距離は書いてないといった点など、観光客に対して不親切な面が多々見受けられる。

他方、柱状節理や玉石も観光資源になる。また、海岸の磯場の亀の手（貝類）などを民宿で調理して出したらおもしろい。さらに、2009年4月に鷹島大橋が開通したため、鷹島モンゴル村（長崎県）から向島が近くに眺められるという新たな宣伝もできるのではないかな。

### （2）海士漁の歴史的・文化的資源を活かした観光化の模索

韓国チェジュ島や松島など、海士・海女の多い国内の本場の海士・海女地区との交流によって伝統的で環境保全型の海士・海女漁の文化を伝承しつつ、それを観光資源として活かしていく方向性が考えられる。

## 6. 良好な立地条件を活かした自給的農業の発展

野菜・果樹作の重要性については既に述べた。

さらに、向島にはイノシシ、マムシ、野犬がいないと聞く。これらの条件は野菜作にとって極めて良好な環境である。1960年頃でもかなりの農家（＝漁家）が牛と鶏を飼っていた。野犬がいないなら、野菜作だけでなく、鶏の放し飼しも可能となる。

のみならず、これらの条件は、観光客が安全に島内を散策できる好条件でもあるし、将来島外の小学生等と呼んで島内で農業体験などをするのにも安全で絶好な条件といえる。

### 註記

- 1) 須川（2003）、13頁。
- 2) 本木（1998）。
- 3) 向島小中学校長からの聞き取りによる

（2009年3月）。

- 4) 『東松浦肥前町向嶋小史』による。
- 5) 『東松浦肥前町向嶋小史』、39～40頁。
- 6) 『東松浦肥前町向嶋小史』、10頁。玄海町値賀村が母村で、向島はその植民地とも言われる。
- 7) 『東松浦肥前町向嶋小史』、54頁。
- 8) 『入野村誌』、17頁によると、1930年でも20戸とある。
- 9) 『東松浦肥前町向嶋小史』、18頁。
- 10) 『東松浦肥前町向嶋小史』、73頁。
- 11) 海士漁を始めた当初は「売価は高値を呼び、努力次第ではかなりの収入が得られ、外国航路の船長以上の収入ではなかったろうか。」（『東松浦肥前町向嶋小史』68頁）と言われている。
- 12) 唐津市議会2009年3月定例議会での議員による「玄海地域の漁場環境は」という質問に対し、農林水産部長が「必要な藻場の減少が進行し漁業資源が減少している」と回答している（『唐津市議会だより』、10頁）。
- 13) 下記の註15）を参照。
- 14) 五條（2003）。
- 15) 山田昌弘・白川桃子『「婚活」時代』ディスカヴァー 21、2008年。
- 16) 2009年3月15日向島小中学校で開催した佐賀大学客員研究員・長嶋俊介鹿児島大学多島圏研究センター教授による講演会での指摘をほぼそのまま引用させていただいた。
- 17) 玄海諸島7島を対象に2003年度から5年間実施された県・市による1億円規模の補助事業で、散策用マップ・道順案内板設置、パンフレット作成、伝承文化の勉強会実施・教本作成、ウォークラリー・交流事業、イカ釣り・磯遊び・農作業体験・交流、伝統食品などの商品化・販売事業、草花・オリーブ植栽、防波堤壁画描画などが行われた（唐津市離島振興課資料による）。

### 引用文献

- [1] 『入野村誌』入野村教育會編、1933年。
- [2] 『唐津市議会だより』、第19号、2009年5月1日。
- [3] 本木修次『小さな島の分校めぐり』ハート

出版、1998年。

[ 4 ] 五條満義『家族経営協定の展開』筑波書房、2003年。

[ 5 ] 『シマダス』日本離島センター。

[ 6 ] 須山聡「島嶼地域の計量的地域区分」平岡昭利編著『離島研究』海青社、2003年。

[ 7 ] 『東松浦肥前町向嶋小史』向島小中学校、1996年。

[ 8 ] 『向島開発碑』碑文、1984年建立。

[ 9 ] 山田昌弘・白川桃子『「婚活」時代』デイスカヴァー・トゥエンティワン、2008年。

## 謝 辞

本稿は向島区長の古川一之様と向島小中学校長の豊留和則様のご協力により佐賀大学海浜台地生物環境研究センターの環境社会学分野の教員・学生メンバーが2009年1月・3月に行った漁業世帯と教職員世帯の悉皆調査、ならびに2008年5月と2009年3月にともに向島を訪れた本学客員研究員の長嶋俊介鹿児島大学多島圏研究センター教授からの御教示を基に作成した。関係の皆様のご厚情に深く感謝申し上げたい。